

---

# レリジャス

3 Aの1人目

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レリジャス

### 【Nコード】

N3202I

### 【作者名】

3Aの1人目

### 【あらすじ】

舞台は政府警察特殊部隊基地

テロリストが皇居と国会議事堂に

爆弾を仕掛けた！

結末はどうなるのか

## 第一部『レリジャス』

プロローグ

あの事件はいつたいたいなんだったのか・

あのグループの犯行は

すごかった

第二次世界恐慌と言われたあの不景気

その不景気が回復し始めたその矢先の出来事だった

2015年

政府警察特殊部隊基地

俺は特殊事件対策課の青山守だ

この特殊部隊というのはテログループ、

犯罪組織、シンジケート麻薬組織の

犯行を食い止める役割だ

ここには頭のいい人間が集まっている

さて、説明はさておき大変なことが起こった  
テログループが動き出した・・

昨日

プルルルル、プルルルル

ガチャ「もしもし、対策課です」

電話にでたのは対策課では数少ない女だ

名前は中島由香なかしまゆか

得意とされているのは話術だ

だから電話係をやっている

「皇居のまわりと国会議事堂に爆発を仕掛けた。

爆発をとめたければ金を用意しろ。50億だ。

ではまたかけなおす」

「逆探知できたか？木下」

対策課の部長である俺がグループの探知や

特定の場所を調べる仕事をする

きのしたかつや  
木下勝也

に聞いた。

「はい。大体場所は特定できました。

場所はええと・・・北海道の函館です。」

この一言で対策課の空気が一変した

「函館!!!?嘘だろ?」

函館からわざわざ皇居と国会議事堂に

来て爆弾を仕掛けたとでもいうのか?

それともグループの犯行だろうから

全国に散らばっているのか・・・

「佐山!!!」

「はい。何でしょうか」

なまきしひろし  
佐山浩二

こここの対策課に入ってまだ半年しかない

23歳だ。若いが将来

有能な人材になることは間違いないだろう

「函館から電話をかけたことをどう思う？」

「函館自体はあまり意味はないと思いますが  
それより気になることがあるんです

犯行グループは皇居と国会議事堂に

爆弾を仕掛けたといいましたね？」

「そうだな」

「そう簡単には爆弾を仕掛けられないと思います」

「何故だ？」

「あそこは人通りがとても多い場所です

ましてや皇居と国会議事堂は警備の数は

そうとういます。さらにここ十数年で

皇居の周りを走るマラソンランナーが

たくさん増えています」

「うーん・・・確かにそうだな」

流石俺の見込んだ男だ。

推理力が抜群だ

「部長！また電話がかかってきました

また探知お願いします」

「木下ー探知機につなげ」

ガチャ「もしもし」

「もしもし。金の用意は出来たか？」

「いいえまだです」

「入金期限は1週間待つてやる。一日でも過ぎたら

国会議事堂、皇居の順番で爆発する

それでも入金しなければいろいろなビルに突っ込む

あ、そうそう。いい忘れたが、変な考えを

起こすなよ。」

「どついつ意味ですか？」

「爆弾を回収しようとしても

無駄だ。地面の揺れを感知して、

爆発する。入金するしかないことだ。

あきらめるハツハツハ。

では健闘を祈る」

そのことを考えていたのに駄目になった

ほかの方法を考えなければ

「木下ー探知どうなったー」

「場所はアメリカのロサンゼルスです」

今度は海外だ・・・

探知は無駄のようだ

手のうちようがなくなってきた

入金しなければならぬのか・・・

どうすればいいんだ

俺はとりあはず上の人に相談しようと思った



「失礼します」

「何だ。青山君じゃないか

どうしたんだ。珍しいな」

「大きい事件が起きてまして・・・」

今起こっている事件を総務課の所長に話した

「・・・でいくぐらいだせそうでしょうか？」

「青山君・・・君には失望したよ。随分弱気な発言じゃないか

それを食い止めるのが君たちの仕事じゃないのか！

頭を冷やしたまえ」

そうだ・・・俺は何をやっているんだ

犯人の言いなりになっては駄目だ

よし！出発だ

アメリカの『ロサンゼルス』へ

爆発まで残り六日



## アメリカ ロサンゼルス

アメリカへ着いた。

いろいろ調べるのは佐山、

大黒人志

対策課暦20年のベテランハッカー49歳

二宮亮二

唯一のハッカー36歳

横山美佐

年齢不詳

の4人にまかせた。

俺と一緒に行動する人は

橋口健

足が速く、拳銃さばきがはやい

宮本啓

対策課のリーダー的存在

俺の次はこいつだと思っている。45歳

しろいしまり  
白石真里

動きがすばやく、IQ150の天才。34歳

この4人で基地に潜入

二時間後基地と思われるところに着いた

ここがテログループの居場所だ

かなりボロイ家だ。ボロイが3階建てだ

まわりに家らしきものがひとつもない

むしろ木の方が多い

「よし！突入だ！！」

ガン！

ドアに向かって勢いよく突撃した

ドアが開いたが中が薄暗い

「おーい誰かいないのか！出て来い！」

ちっ、しかたないな

「橋口は1階を！宮本は2階！白石は3階を！

調べてくれ！俺は家の周りを捜査する」

「はい！」

一同が返事をした

「青山さん！怪しい手紙がありました」

橋口が無線で叫んだ

手紙にはこう書いてあった

『探知しても無駄だ。お前の考えは見え見えだ

アメリカまでご苦労だった。だまって金を

よこすんだな』

「くそ！逃げられた！」

「青山さん」

白石が言った

「探知がばれてるっていうことは

おかしくありませんか??」

IQ150・・・流石だ

考えてるポイントが違う

「何でだと思っ?」

「こつちが探知して場所を想定して、この家に

くることを予想していた。それが・・・」

「それかなんだ?」

「対策側に犯人がいるということのどちらかです」

まさか・・・そんなことありえない・・・

「青山さん!また手紙がありました」

「何!??」

手紙の内容はこう書いてあった

『我々の名前ぐらい教えてやろう』

「レリーフレリジャス」だ』

レリーフレリジャス?

何だその名前……

まあ名前はたいした問題じゃない

それより何か鍵になる証拠を探さなければ

ピッピッピ……

「おーいみんな一階にきてくれー」

「どうしたんですか？」

「音がしないか？」

「えっ……」

爆弾か？

「爆弾を探すぞ！……！」

「爆弾は台所の引き出しに設置してあった」

「みんなー！逃げるー！……！！……！！」

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0！

『ドツカーーーーーーン!!!!!!!!!!』

家全体が炎に包まれた・・・

俺たち4人は間一髪で脱出した。

だが、橋口は腕の一部を負傷し

救急車でロス市内の病院へ運ばれた

負傷者を出してしまった



俺は全員を守ることが出来なかった

橋口のためにも犯人をいち早く見つけて

爆発を阻止しなければならない

犯人は逃亡した。

大爆発まで残り5日

プルルルプルルル

「もしもし青山だ。中島か？」

「はい部長。どうしました？」

「ああ。成功したが爆弾が

しかけられていて、橋口が腕の

一部をやけどした・・・

犯人にも感づかれて

逃げられた」

「逃げられた？おかしいですね」

「確かにおかしい」

「なぜ犯人にはれているのでしょうか？」

「うーん犯人は頭がいいのかな」

「確かにいいでしょうが・・・」

まあその件はおいといて、

また犯人から電話がかかってきて

早く金を用意しろと言ってきました」

「またかかってきたのか？探知は？」

「しました。こんどはブラジルの

サンパウロです。」

「サンパウロだな。よし行くか！」

「待つてください！むやみに行くのは

危険です！」

「また爆弾が仕掛けられているかもしれない

だか黙ってみているわけにはいかない」

「しかし・・・」

「あ、そうそう組織の名前レリーフレリジャスとか言ってたな。その辺も洗っといてくれ」

「分かりました」

「部長・・・」

白石が困ったような顔で話しかけた

「なんだ？」

「犯人は対策課の中にいるかもしれませんが・・・」

「何を言い出すんだ！そんなことは

ありえない！！」

「じゃあ胸を張って対策課サイドには

犯人がいないことを言えますか？」

「なかまを信じられなければ

この仕事なんかやってない！」

「そうですね。じゃあ気を取り直して

ブラジルに行きましょう」

そんなわけでブラジルサンパウロに

飛び立った

大爆発まで残り4日

## ブラジル サンパウロ

ブラジルのサンパウロ

ブラジルの南東部の南工業都市

コーヒーが有名だ。

人口はおよそ948万人の都市だ

「なんでこんなところに基地が

あるんだよ・・・」

宮本がぼやいた

「あつついですね部長」

白石が言った

「そつだな37度だつてよ」

そんな話をしているうちに基地に着いた

「おいそつとつでかくないか？」

俺は驚いた

敷地内の想定の大きさは

縦450M横500M高さ18階だての

巨大な建物だ

「なんだ・・・このギャップの差」

この広さをどうやって調べればいいんだ？

とにかく中に入ってみたいと分からない

「よし相手の警備に気づかれないように

行くぞ！」

「部長。手分けしていったほうが

いいと思います」

白石がいなかったらここまで

これなかったらどう

「そうだな、宮本は反対側から

白石は中央から、俺は正面から行く

爆弾のスイッチを探してくれ

では健闘を祈る」

「待ってください。木下から

超小型トランシーバーを

預かってきました

これで連絡を取り合いましょう」

このトランシーバーの大きさは

4cm。これなら敵にも

気づかれない

「よし！出動！」

俺は正面から入った

辺りは薄暗い

階段らしきものを探さなければ・

随分歩いたが、階段が見当たらない

そういえばこの建物部屋が

ひとつも見当たらない

おかしい・・・なんなんだ

奇妙すぎる

非常階段が見つかった

階段を上がっていく

二階だ。

ドアが開かない・・・

仕方ないから三階に行った

しかしまた開かない

結局最上階の18階についてしまった

緊張しながらもドアを開けてみた

開いた。

その瞬間何かに当たった

目の前が真っ暗になった・・・



## パプアニューギニア

「イタタタタ」

……どのくらいたっただろう

ドアを開けた瞬間に誰かに殴られた

感触がしたがあまり覚えていない

それよりここは何処だ!?

密室の中に閉じ込められている

ガチャ

「x |!!!!!!」

外国人が入ってきて聞き取れない

言葉でしゃべってきた

とりあはず外に出た

白石と宮本に連絡しなければ

……あれ?連絡が取れない

これからどうしすればいいんだ・

とりあはずやるべきことは

場所確認だ

日本人はいないのか？

人通りの多い商店街

らしきところについた

いろいろな人種のひとがいて

その中で英語を話しかけている

人がいたので

英語で話しかけてみた

「Excuse me, where is here?」

(「すみません、ここはどこですか?」)

「Here is Papua New Guinea」

(「ここはパプアニューギニアだよ」)

「Thank you」

(「ありがとう」)

パプアニューギニア???

ブラジルからだいぶ飛ばされたようだ

とにかく日本に

戻らなければ・

大爆発まで残り3日

## 暗号解説

とりあいずなんとかして

日本についた。

なぜこんなに飛ばされたんだろう

対策課の人たちに話してみることにした

「アメリカのロサンゼルス

ブラジルのサンパウロ

パプアニューギニア

何の共通点があると思う?」

「さあ・・・分かりません

犯人が意図してこの国に

なったのかすら分かりません」

久しぶりに木下に会った

「白石さんと宮本さんは

どうなっただんですか?」

「ブラジルの基地で別行動

をとったから生きてるのさえ分からない」

「そうですか。みつかるといいですね」

白石、宮本はどこにいったんだろう・・・？

「犯人の情報は何かつかんだのか？」

「正体自体分からないので

詳しくは調べられませんでしたが、

2つ分かりました。

1つはレリーフレリジャス

という組織名についてです」

「名前には何か意味はあったのか？」

「はい。レリーフというのは

多分reliefのことです

レリジャスというのは

religiousの「じぶじぶ」

「英単語をあらわしていたのか・・・」

reliefは救済、religiousは宗教

って意味だったな？」

「はい。そうです」

レリーフレリジャスは表向きは

宗教の力で困っている人たちを

助けようとしているということですね」

「もうひとつ分かったことは何だ？」

「実はこっちのほうが重大です」

レリーフレリジャス側に

対策課の人がついていているようです」

「・・・えっ!!??」

白石の言っていたことは本当だった

信じたくない・・・

事実だったなんて

「白石も同じことを言ってた・・・」

「やっぱりそうだったんですね」

「ちょっと海外で疲れたからもう寝るわ」

今は夜の12時

疲れたのでもう寝ることにした

大爆発まで残り2日

「それは・・・白石と木下がいていたんだが  
対策課側に犯人がいたらしい

だから俺が行くと知っていて

行動していたということになる」

「そんな・・・」

一同に不安の声が漏れた

「部長。ロサンゼルス、サンパウロ

パプアニューギニアの関係を

考えていたんですが

レリーフレリジャスのとき

英単語だったので今回も

英語で考えたところ」

木下がボードに文字を書き始めた



## 三国の共通点

P a p u a N e w G u i n e a .

「行った国の順番に一、二、三番目の

頭文字をとっていくと

L

P

G

になります」

L P Gとはいったいなんなんだろう・・・

「木下、L P Gとは何なんだ」

「L P Gという単語はひとつしかありません

しかも今回の事件に

関係がありそうなことが分かりました

犯人は意図的にこの隠れメッセージ

を伝えたかっただけです

LPGに関して詳しい方に

来ていただきました

株式会社関東ガスの忠岡さんよろしくお願いします」

ガス会社！？まさかLPGって・・・

「よろしくお願いします

忠岡と申します

LPGについて話させていただきます

LPGというのは

Liquefied Petroleum Gas

の略で液化石油ガスのことです」

「液化石油ガス!？」

つい大声をあげてしまった

「はい。液化石油ガスは身近な

存在にあります

それはカセットボンベです

その主成分は液化石油ガスなのです

あとは給湯器などもLPGです」

「へ〜知らなかった・・・」

普段なかなか知ることの出来ない

「ただガスですから危険は

おおいにあります。

カセットボンベから液が漏れて

大爆発した事故は最近は

ないですが、カセットボンベが普及

したところはたくさんありました」

やはりガスはかなり危険だ

こんなのが皇居で爆発したら・・・

考えただけでも寒気がする

このあともガスの話を30分はなしてくれた

そして会議が終わり

もう一日が過ぎようとしている

本当に犯人は捕まるのだろうか

大爆発まで残り一日と六時間

爆発まで残り少ない・・・

ふと頭に疑問がよぎった

なぜ犯人に一度も会わなかったんだろう

なぜあれから犯人から電話が

かかってこないんだ？

犯人は対策課の中にいる

怪しいやつをさがさなければ

怪しいといえはみんな怪しい

白石と木下は何で対策課の中に

犯人がいることが分かったんだ？

そのこと自体おかしい

もしや・・・

この2人が犯人なのか？？

優先順位としては

爆発を抑えるほうが先だな

液化石油ガスか・・・

爆弾は埋め込まれている

回収以外に方法があるのか・・・

そもそも爆弾自体あるのかさえ

分からない

ただの脅しだってありえる

とりあはず現場にいかないと

誰かの知恵も借りたいが

対策課の人たちを信じすぎてもだめだ

単独行動が一番だ

皇居についた

警察官ばかりだ

12時から警備が手薄になる

犯人はその時間以降に爆弾を

仕掛けたに違いない

犯人は入金の指定場所をまだ

言っていない

なぜだ？

この事件は疑問が残る事が多い

犯人は「地面の振動を感知したら

爆発する」

と言っていたが、これは矛盾だ

地面なんか車が通ったら

すぐ振動してしまう

もうとつくに爆発しているはずだ

おかしい。

まさか・・・爆弾なんて仕掛けてないんじゃない

## 大爆発

なんて考えている間に

大爆発まで残り16時間

危険物処理課から爆弾センサー

を借りた

爆弾センサーは異物をはっけんしたら

音がでて知らせてくれる

深さ300メートルまでセンサーは届く

ピー

えっ？

爆弾は仕掛けられていた

推定爆発時刻までのこり2:15:06

二・・・二時間!!!???

あと二時間で何ができるんだ!



予定の時間より14時間はやまってしまった

とりあはず対策課に戻らなければ

「大変だ！みんな残り二時間しかない」

「知ってます。犯人から電話がかかってきました」

木下はやけに落ち着いてる

「犯人からさっき電話がかかってきて

残りあと2時間だ！さっさとしろ

本当に爆発させるぞって

言っていました」

10時間あれば防げるのだが

2時間じゃ・・・

国会議事堂大爆発まで残り2時間

皇居大爆発まで残り22時間

この短時間で爆弾を処理しなければいけない

一人では到底無理だ

対策課と危険物処理課と

協力しなければ

俺は走ってみんなに

来てもらおうように頼んだ

残り1時間30分

国会議事堂

「爆弾処理なんかやったことはありませんが

どうすればいいんですか？」

佐山が処理課の亀有に聞いた

「手伝いだけやればいいんや」

主に見つけにかかると

亀有、佐藤、宮内

見つけてからの処理

有明、多田野、武田

電話でのやりとり

中島

最悪の事態をそうていしての入金準備

大黒、二ノ宮

リーダー（指揮）

俺（青山）

そして

早速始めた

「亀有さん。爆弾はどの辺に

ありそうですか？」

佐山が聞いた

「そうやな・・・まだ発見してないから

なんともいえんなー」

そうして30分たった

「あっ！発見したで深さ

280メートル!?!?」

「深い……」

みんなが口をそろえた

「残り時間が少ない。」

ブルトナーを使いましょう」

宮内が始めてしゃべった

「それだと議院のひとたちに

ばれてしまいます」

俺は珍しく熱い口調でしゃべった

「いや。命がかかってるんだ

ばれるとかばれないの問題じゃない

いずれ公になるんだ」

「いや、しかし振動を感知すると……」

「大丈夫だ。そんな爆弾はない

ただ犯人が発見しだい

爆発すると言っているんだ

犯人に発見させないために

おとりを使おう。

金を渡すのでどこかで会いましょうって言うんだ

犯人と接触している間に

爆弾を回収する」

すごい・・・いい手だ

「分かりました・・・その作戦でいきましょう」

犯人に直接中島が電話した

「もしもし金の入金準備ができました

ただし現生渡ししか出来ませんので

今から40分後ホテルサンシャリアに

来てください」

「・・・分かった」

時間は40分以内だ

20分後

ブルトージャーの回収によって

爆弾が回収された

「なんだ？この爆弾

見たことのない形だ」

亀有が困った顔で言った

そして格闘すること15分

見たこともない配線で

大分苦戦している

約束の時間になってしまった

爆発まで3分15秒

「クツ、だめだ多田野頼む」

一番の処理名人亀有が

降参した

時間が刻々と過ぎいていく

爆発まで残り20秒

「だめだ！議事堂の中には

もう人がいない

逃げるぞ！！！」

もう諦めるしかなかった………

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

ピッピッピッ

「……っ!？」

爆発……しな……かつた？

「これは……爆弾じゃないのか？」

俺は今複雑な気持ちだ

「そつみみたいだ」

亀有が安心した声を聞いた

「は？ふざけんな今までののは

なんだつたんだ!！」



みんな怒り狂っている

その時

怒りがこみあげてきた

ふざけるな！！！！

それと引き換えに

安心している自分がいた

一件落着でいいのだろうか？

その答えは返ってこない

俺らの1週間は

上の人には

遊びにしかないのだろうか・・・

-----  
第一部

『レリジャス』

完

**第二部『黒幕』（前書き）**

レリジャスの続き

第二部です

## 第二部『黒幕』

あの事件……いやテストから二ヶ月

その後は特に何もなく

平凡な生活を送っていた

ただ気がかりなのは

白石、宮本、橋口

この三人はどうなったのか

未だ未明だ

連絡はない

果たして生きてるのだろうか

もうひとつ気がかりなのは

テストにはまだ続きがある

ということだ

『黒幕は今動き出した』

あの手紙は総務課からに  
なっていたが

この組織は大きすぎる

いろいろな課を紹介すると

総務課、危険物処理課

外国任務課、情報捜査課

極秘任務課、対策課

がある

六つの課があるので

なかなか黒幕は分からない

本当に総務課がやったのかすら

知らない

とにかく探らなければ・・

## 資料室爆発

その時

ドッカーン

何処かで爆発が起きた！

場所は・・・

資料室だ

人だかりがすごい

そこには木下がいた

「大変です部長。本当に爆発が

おきてしまいました」

「そのようだな・・・しかも資料室

大事な資料が保管されているところなのに」

やはりテストはただのテストではなかった

事件に発展してしまった

黒幕は誰だ！

そしてこんなことやったんだ

絶対見つけてやる

また見えない敵との戦いが

始まった

資料室を爆破されたが

見知らぬ敵なのか、何処かの課の

攻撃なのか

俺はある仮説を立てた

資料室の何かの資料を知られたら

困る人物がやったんじゃないのか？

その人物は何か裏があるはずだ

さらにそいつは今誰かに

追われているから

急いで爆破させた

この仮説が正しければ

犯人として一番怪しいやつは

何処かの課の偉い人が

当てはまりそうだ

その頃

総務課の会議室では

「今回の爆破事件についてだが  
たさんの資料や

過去の事件について

書いてあったことも

全部消えてしまった

犯人を見つけ次第

早急に処分したいと思う」

一番偉い総務課総長の



竹ノ塚 仁だ

「警察にはこのことは言わないんですか？」

こいつは南 達也だ

ちょっと生意気なところがある

「しかも起きた場所が

資料室ですからね・・・

秘密資料もたくさんありましたか

やられました」

「許せない。わいも協力するわ」

「本当ですか？ありがとうございます」

これで仲間が増えた

亀有が本当に

『仲間』

だといんだけど・・・

本当のところどうだか

分からない

亀有の心の中は

まったく読めない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3202i/>

---

レリジャス

2010年10月14日18時04分発行